

## 松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】柳沢 史明

【所属】（助成決定時） 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化学科専攻（美学芸術学）

### 【研究題目】

フランス植民地主義とネグリチュード運動

－「アール・ネーグル」の創出、流用をめぐる力学とその言説構造の分析

### 【研究の目的】

私の研究は、二十世紀前半のフランスを中心としたアフリカ・オセアニア彫刻の「発見」と受容をめぐる文化史研究である。「アール・ネーグル（黒人芸術）」(art nègre)をめぐる歴史と言説を、多領域にまたがる文化事象（美術品をめぐる市場形成と美術商、人種主義と芸術、芸術理論と人類学の交点、黒人文化運動の際のシンボル）として捉え返し考察することで、他者を「異質なもの」として表象し受容する側と、その表象され応答する側との、歴史的・文化的な相互作用のプロセスを辿り、他者表象にまつわる文化変容の力学を明らかにすることが目的である。特に、「アール・ネーグル」という表象が備えていた価値に着目し、黒人文化運動に関わった人物らが、どのように自らと関わりうる表象を自己と関係づけたかを追いつつ、支配者の理論を借用し、読み替えていく過程を辿ることが主眼となる。

### 【研究の内容・方法】

貴財団の援助にあたって、上記に記した「アール・ネーグル」をめぐる諸問題の中でも、黒人文化運動と「アール・ネーグル」との関係性に焦点を当てた。ネグリチュード運動における黒人知識人ら(L・S・サンゴールなど)は、西洋芸術批評家らの手によるアフリカ彫刻分析を引用し、自分たちの文化的アイデンティティの形成と政治的独立のための手段として用いていた。他方で、「アール・ネーグル」をめぐるなされた西洋的理論や解釈（美術商ポール・ギヨーム、資産家・美術収集家 A・バーズなど）を、黒人の文化的地位向上のために用いようと試みたのはフランス植民地圏のみに見られた現象ではなく、それはアメリカの地においても同様だった。特にハーレム・ルネッサンスと呼ばれる二十年代の黒人文化運動の中で、フランスのモダニストらによって「発見」され「評価」されたアフリカ彫刻を、自分たちの文化・芸術制作とどのように関係づけていくか、が議論されていた。ネグリチュード運動によって表明される人種主義的芸術論は同時代的な文脈の中で考察していく必要がある。

そこで本研究の方法として、ネグリチュード運動との類似性と差異を検討する参照項にハーレム・ルネッサンスを選び、両大戦間期にアメリカから渡仏し再びアメリカに戻った黒人知識人や芸術家のテキスト（A・L・ロックなど）を文化史的観点から捉え、アフリカ彫刻をめぐる言説の受容を同時代的文脈の中で考察した。その際、パリのケブランリー美術館や2007年に開館した「国立移民史都市」(la Cité nationale de l'histoire d'immigration)にて、他文化・他民族表象に関する資料収集を行うと同時に、そこで行われている展示表象を批判的に検討した。

### 【結論・考察】

ロックを始めとするアメリカの黒人知識人らにとって、アフリカ芸術の「発見」の物語やそれを支持・主導するギヨームやバーズの著作や活動は、アフリカ系アメリカ人芸術家らが如何にしてアメリカにおいて自らの芸術を展開していくか、という社会的・文化的闘争のための論拠となると同時に武器となっていた。つまり、如何にして歴史の内部にアメリカの黒人芸術家らを位置付け、正当化しつつ、教育していくか、という展望の下、西洋で「発見」されたアフリカ芸術とその評価をめぐる議論が流用されていた。そこでは、ネグリチュード運動同様に黒人の芸術的才の存在を西洋的言説から引き出しつつも、それをアメリカの文脈へと、つまり奴隷制やアメリカの黒人による造形芸術史と関連づけることで、フランス植民地圏とは異なるベクトルへと向かっていくこととなる。本研究によって、アフリカ彫刻と黒人文化運動との関わりを複数化させ、大西洋を横断するより広範な文化事象として「アール・ネーグル」を捉える視点が確保できた。